

〈声〉の採集者列伝
聞き手たちの時代

柳田 国男

「声」の発見

— 柳田国男と『遠野物語』 —

石井 正己

一、文語体による「物語」の創造

柳田国男を「声」という問題から考えようとするとき、やはり明治四三年（一九一〇）六月に発刊された『遠野物語』を無視することができない。柳田は多くの著書を著したが、遠野出身の佐々木善善から聞いた話をまとめたこの作品は、唯一の聞き書きであった。柳田が『口承文芸大意』（岩波書店）で、「口承文芸」という概念を提出したのは昭和七年（一九三二）四月のことであるが、その出発点に位置する作品と見ることには不都合はあるまい。幸い、『遠野物語』には、草稿本・清書本・初校本などが残っている。今、それらを使って、刻印された「声」に対する認識を探ってみたいと思う。

広く知られているように、『遠野物語』は擬古的な文語体で書かれていて、研ぎすまされた名文としての評価が高い。しかし、日本の文体史を考えてみると、小説の文体はすでに明治二〇年代には口語体に移行している。もちろんすべての文章が一斉に口

語体に移行したわけではないが、文壇に精通していた柳田がそれを自覚していなかったはずはない。『遠野物語』は小説ではないが、時代の趨勢から逆行するようにして、文語体を選択をしたことは間違いない。

序文では、その後に記された一九話の「物語」は、「目前の出来事」「現在の事実」であると主張している。序文が書かれたのは清書本の段階なので、発刊直前だったことになるが、現在残る草稿本と比較しても、文体に大きな変更は見いだせない。草稿本の段階で早くも文語体を選択していたことになるが、そこにはすでに序文の主張が潜在していたと見ていいだろう。そうであるならば、「目前の出来事」「現在の事実」を構築するための方法として、文語体の選択があつたはずである。

例えば三話は、佐々木嘉兵衛が山奥で遭った美女を銃で撃ち、その黒髪を切つて持つてくる際に、山男に取り返されたという話である。助動詞に傍線を引きながら、その冒頭を引用してみよう。

三 山々の奥には山人住めり。 トチナイ 栃内村和野の ワノ 佐々木嘉兵

衛と云ふ人は今も七十余にて生存せり。此翁若かりし頃、
をして山奥に入りしに、遙かなる岩の上に美しき女一人あ
りて、長き髪を梳りて居たり。

ここには、文語の助動詞として、存続の「り」「たり」と過去の「き」が見つかる。これらの助動詞の多用はこの話に限らず、この作品全体を貫く現象として確認できる。この「山人住めり」「今も七十余にて生存せり」という存続の助動詞が、「目前の出来事」「現在の事実」という主張を支えていることは言うまでもない。

また、「此翁若かりし頃、山奥に入りしに」の「き」は、佐々木嘉兵衛が体験した確かな過去を表すが、単なる過去では終わらない。続く「長き髪を梳りて居たり」という存続の助動詞への展開は、嘉兵衛が過去に体験した「目前」「現在」として語られてゆく。嘉兵衛の視線に添って読み進めてゆく読者は、山奥で起こった「目前の出来事」「現在の事実」の現場に立ち会うことになるのである。実は、文語体が重要なのは、こうした助動詞の機能にあったのではないかと思われる。助動詞に導かれて、読者は登場人物と同化して、「目前の出来事」「現在の事実」を示す現場に入ってゆくことができるからである。ただし、三話には「耐へ難く睡眠を催しければ」に過去の「けり」が現れる。これは、嘉兵衛が睡眠幻覚の状態にあったことを見事に表している。しかし、この作品には過去の「けり」はほとんど見られず、存続の「り」「たり」と過去の「き」が交錯する文体が基調になっている。

こうした『遠野物語』の文語体は、単なる擬古文の模倣ではな

く、それまでにない文体の創造だったと思われる。柳田自身にしても、文体を模索していた段階の実験の一つだったにちがいない。それは古代以来の「物語」の伝統に則りながら、まったく新しい近代の「物語」の創造だった。しかし、同じような作品が書かれることはついになく、『遠野物語』はそのまま孤立してしまった。口承文芸研究の出発点とされながら、口承文芸史に位置づけることが困難なのは、そうした状況と密接な関係があるはずである。

二、裏書きに残された聞き書きの「声」

柳田が佐々木から聞き書きを行ったメモは、手帳かノートに書かれていたと思われるが、発見されていない。現在残る草稿本は最も早い段階の資料だが、その内容から見て、聞き書きを行った現場のノートではない。草稿本以前の段階を示す資料として唯一残るのは、「早稲田大学出版部」の原稿用紙の裏に書かれた鉛筆書き一枚しかない。それは草稿本末尾が「百九」の番号で空白になった後に続く内容である。これは初版本の二一六話の末尾から一一八話に相当しているので、この前にもう一枚があったはずである。

今、一一七話の冒頭に相当する箇所を引用してみよう。

○コレモアル所二「ト、ト」ト「ガ、」ト娘ノ嫁ニ行ク支度ヲ
買ヒ二町ニ行キ

戸ヲ閉シテ「誰カ来テモアケルナヨ」「ハ」トイヒテ出テテ

リ昼頃山ハ、

来テ娘ヲ取テ食ヒ娘ノ皮ヲカフリ娘ニナリニ^(ママ)ナル夕方二人ノ

婦り来テ「オリコヒメコ居タカ」トイヘハ「ア、キタマス、ハヤカツタナ

モシ」ト答ヘ二親ハ支度ノヨキ衣ヲカヒテ娘ヲヨロコハセタリ

漢字片仮名交じりの表記を用いて、すでに文語体を採用して書いていることに気がつく。柳田は後に、佐々木の話は訛りが強く、聞き取りにくかったと回想しているが、この聞き書きははそうした痕跡もないほどに純化されている。これは昔話であるから、全体を方言で語った可能性が高く、この文章が佐々木の語った話そのものでないことは明白だろう。その内容はともかく、佐々木の「声」を抹殺することで、文語体化を図ったことになる。

だが、この裏書きは佐々木の「声」のすべてを抹殺したわけではない。「ト」、「ガ、」は父母を意味する言葉であり、「誰カ来テモアケルナヨ」「ハ」と「オリコヒメコ居タカ」「ア、キタマス、ハヤカツタナモシ」は父母とオリコヒメコの会話であり、どれも方言で書かれている。全体が漢字片仮名で表記されているが、括弧で括られた箇所は、佐々木の語った言葉を残していたことになる。括弧は佐々木の「声」を残したことを示す記号だったのである。初版本で、一一七話の冒頭を引用してみよう。その際に、裏書きと異なる箇所には傍線を引いておいた。

一一七 昔々^{昔々}これもある所にト、とガッと、娘の嫁に行く

支度を買ひに町へ出で行く^{出で}とて戸を鎖し、誰が来ても明けるなよ、はアと答へたれば出でたり。昼の頃ヤマハ、来りて娘を取りて食ひ、娘の皮を被り娘になりて居る。夕方二人の親帰りて、おりこひめこ居たかと門の口より呼べば、あゝ、ゐたます、早かつたなしと答へ、二親は買ひ来たりし色々支度の物を見せて娘の悦ぶ顔を見たり。

新たに「昔々」という昔話の冒頭句が付けられただけでなく、裏書きに記された筋書きをより正確に書き改めていることに気がつく。ここにも、三話の冒頭部に見えた存続の「たり」と過去の「き」を見つけることができる。これは昔話なので、語り部が語る「……たずもな」を翻訳した「けり」が使われるべきところだが、それは見られない。柳田には、おそらく伝説と昔話を書き分ける意識がなかったのである。

だが、一方ですぐに気がつくように、裏書きで括弧に括られていた箇所を見ると、括弧は取れたものの、「ト」、「ガ、」にしても、「誰が来ても明けるなよ」「はア」「おりこひめこ居たか」「あゝ、ゐたます、早かつたなし」にしても、ほとんど異同がない。裏書きでは括弧のなかった「山ハ」、「が」「ヤマハ、」と片仮名表記になっていた、方言であったことが浮かびあがる。方言で書いていた言葉や会話文は、裏書きがそのまま生かされているのである。

『遠野物語』は文語体を採用して、共通語化を図った。やや古風な共通語であったが、それは日本列島の古層に残る「物語」を表すにふさわしい文体だったはずである。だが一方で、これは「遠

野」に固有の「物語」でなければならなかった。その際に方言を採用することで、文語体では消えてしまう「遠野」の「声」を残すことができたのである。この作品が「遠野物語」と命名されたのには、深い理由があったと見なければならぬ。

三、「遠野物語」に残された方言の位相

しかし、『遠野物語』の会話文はやはり共通語が中心で、一一七話と同様に会話文に方言を残した箇所は多くない。だが、例えば、獵師が山中で長者の娘に遭ったという六話は、こうなっている。

六 遠野郷にては豪農のことを今でも長者と云ふ。青笹村大字糠前ヌカマヘの長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某と云ふ獵師、或日山に入りて一人の女に遭ふ。怖ろしくなりて之を撃たんとせしに、何をぢぢは無いが、ぶつなと云ふ。驚きてよく見ればかの長者がまな娘なり。何故にこんな処に居るぞと問へば、或る物に取られて今は其妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食ひ尽して一人此の如く在り。おのれは此地に一生涯を送ることなるべし。人にも言ふな。御身も危ふければ疾く帰れと云ふま、に、其在所をも問ひ明らめずして遁げ還れりと云ふ。

獵師が女を撃とうと思ったときに、女は「何をぢぢは無いが、ぶつな」と言った。この言葉は口語体だが、共通語ではない。ま

さに遠野の方言で書かれていて、緊迫感のある場面には登場人物の「声」が生で残ったことになる。留場栄の『むらことば事典』（私家版、一九九三年）にも、上巻に「おず（おんず）（叔父）」、下巻に「ぶつ（打つ）」が見つかる。「何をぢぢ」は実際には名前を言ったと思われるが、喜善が忘れたのか、柳田が聞きたださなかったのかして、固有名詞は出てこない。獵師の名前が「何某」となつて、はつきりわかっていないことと対応している。だが、こうした箇所には、生の「声」が残っていることになる。

しかし、一方では、「何故にこんな処に居るぞ」や、「或る物に取られて今は其妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食ひ尽して一人此の如く在り。おのれは此地に一生涯を送ることなるべし。人にも言ふな。御身も危ふければ疾く帰れ」は、文語体そのまま、地の文と差がない。実は、『遠野物語』の会話文はこうした文体の方が遥かに多く、基本的には地の文も会話文も共通語である文語体で貫かれている。先の一一七話に方言の会話がよく残ったのは、それが昔話であることと無関係ではあるまい。

ただし、単語ならば、方言はある程度見つけることができる。先の一一七話の「ト」、「ガ」。「ヤマハ、」は片仮名表記になっていた。同様の表記を拾うと、一一話の「ガガ」、四二話の「ワツボロ」、四六話の「オキ」、五〇話の「カツコ花」、五一話の「オツト鳥」、五二話の「クツゴコ」、五三話の「ガンコ」、五四話の「ハタシ」、六三話の「カド」「ケセネギツ」「ケセネ」「マヨヒガ」、

七九話の「ヨバヒト」、一〇九話の「ホラ」、一一一話の「ハカダチ」「ハカアガリ」、一一五話の「ヤマハ」、一一六話の「ト」、「ガ」、「ヤマハ」、「コレデドンドハレ」などが見つかる。これらはみな、『むらこば事典』にも載っている方言である。

だが、片仮名表記でなくとも、遠野の方言ではないかと思われる言葉は見つかる。例えば、六話に「遠野郷にては豪農のことを今でも長者と云ふ」とあるが、これは「長者」が豪農を意味する方言であることを説明したものに他ならない。豪農の意味で「長者」と言うのは遠野独特の方言とは見なさなかったのか、片仮名表記にしていない。しかし、「長者」は方言と見ている言葉ではないかと思われる。

同様にして見てゆくと、五三話の「馬追鳥」^{ウマオヒドリ}、五三話の「郭公」^{クワツッコウ}「庖丁かけ」といった鳥の名前も、やはり方言であろう。実際、『むらこば事典』にもこれらは載っている。「遠野にては時鳥のことを庖丁かけと呼ぶ」とあるのは、「長者」の記述方法と同じである。一一五話の「御伽話のこと」^{オトギバナシ}を「昔々^{ムカシムカシ}と云ふ」という「昔々^{ムカシムカシ}」も、昔話を意味した方言であろう。その形式にこだわらずに、一一七話で裏書きにない「昔々」を挿入してしまったことは、すでに確認したとおりである。このようにして単語としての方言をよく残しているが、それはこの作品がまさに「遠野物語」だったからに他ならない。

四、音読された『遠野物語』

『遠野物語』と「声」の問題を考える最後に、音読のことを取り上げておきたい。前田愛の『近代読者の成立』（有精堂、一九七三年）が明らかにしたように、かつて日本には音読の習慣が広くあった。一方で黙読があったことを想定しなければならぬが、詩歌は言うまでもなく、新聞や小説も音読していたことを示す資料は少なくない。文字言語もまた、声を介して享受されるものだったのである。そうしたことを思えば、口承文芸研究は純粹な口頭伝承に固執することなく、文字を介した音読を包摂しつつ、その概念が再構築されなければならない。

他ならぬ『遠野物語』もまた、音読されることを念頭に置いて書かれたものだったと思われる。すでに引いた一一七話や六話でも確認できるように、本文には部分的に片仮名で振り仮名が付いている。これは草稿本にはなかったもので、清書本の段階で付けられている。地名・人名といった固有名詞はもちろん、普通名詞などにも付いているが、その原則は必ずしも明確ではない。だが、注意深く振り仮名が付けられたのは、やはりこの作品が音読されることを想定して作られたからに他ならない。

実際、『遠野物語』を音読した人としては、折口信夫がよく知られている。昭和一四年（一九三九）一月の『ドルメン』第五巻第一号に載った「遠野物語」と題する長歌は、大正三年（一九一四）冬、神保町の露店で『遠野物語』を買った感激を詠むが、その中に次のような一節が見える。今、昭和二二年（一九四七）の『古代感愛集』（青磁社）から引く。

末ずゑは、べいじも截らず さながらにおきし幾枚。
指もて我は截りつゝ、立ちながら読めり幾枚。

この記述は、アンカット版であった『遠野物語』の形態を彷彿とさせるが、末尾を指で裁断して読んだというのだから、もう物語本文に入っていたと見ている。この「立ちながら読めり―幾枚。」は音読かと思われる。そして、長歌の最後は、次のように結ばれている。

五分しんのらんぶ掻上げて、さ夜深く読み立つ声の わが
声を屢々シマ、ひそめ、若ければ 涙たりけり。遠野物語のうへ
に

この「さ夜深く読み立つ声の わが声を屢々シマ、ひそめ、」は明らかに音読である。しかも折口の場合、街頭のガス灯の下で立ち読みしたり、机に置いたランプの灯りで読んだりしているが、どちらも孤独な音読である。一人でも声に出して読むのが当時の習慣だったのである。

実は、他ならぬ遠野の地で、『遠野物語』を音読したことが明らかに becoming している。昭和八年（一九三三）二月、遠野町郷土座談会と遠野物語朗読会の菊池明八が書いた序文を持つ謄写版が作成されている。菊池はこの時、第五代遠野町長の立場にあったので、実際には町長の名を借りただけの序文かもしれないが、二つの会の実態も明らかでない。だが、序文によれば、『遠野物語』は出版当時五、六冊町内有志の手に保存されていたが、散佚してしまい、今回、佐々木勇吉所蔵本を借りて謄写したとする。発刊から

二三年後、地元遠野でも、『遠野物語』は「名著」になっていたのである。

それにしても、この謄写版が「遠野物語朗読会」で出されたことの意味は大きい。この謄写版は初版本に代わる「朗読」用のテキストとして作られたのである。実際にどのようにして「朗読」されたのかは不明だが、「朗読会」と言うからには、組織を作って定期的に「朗読」する機会が設けられたにちがいない。これは、『遠野物語』の「声」の復活であると同時に、『遠野物語』学習の第一歩でもあった。佐々木はこの時、仙台に出ていたが、まだ存命中であったことからすれば、もう話し手や書き手の手を離れた『遠野物語』の享受が始まっていたことを意味する。

それは、ちょうど柳田が「口承文芸」という概念を提示した翌年のことであった。

参考文献

- ・石井正己『遠野物語の誕生』（二〇〇〇 若草書房。後に、二〇〇五 ちくま学芸文庫）。
- ・石井正己『柳田国男と遠野物語』（二〇〇三 三弥井書店）。
- ・石井正己「むらことばと『遠野物語』——留場栄さんの仕事」『昔話の保存と活用に関する総合的研究』科学研究費報告書、二〇〇五）。

（いしい・まさみ／東京学芸大学）